

「連合2023平和ナガサキ集会」主催者代表挨拶

「連合2023 平和ナガサキ集会」に、全国各地よりご参集の皆さん、大変お疲れさまです。本集会の開催にあたり、主催者を代表して挨拶を申し上げます。

1945年8月9日、11時02分、この長崎の地に原子爆弾が投下され、熱線と爆風と放射線によって、約7万4千人もの尊い命が奪われました。また、その3日前の8月6日、広島では同じく、14万人余りの方々が犠牲になりました。

原爆で亡くなられたすべての方々に、改めて哀悼の意を捧げるとともに、今なお被爆の後遺症に苦しんでおられる方々に心からお見舞い申し上げます。

私たち連合は、結成以来、核兵器廃絶と世界の恒久平和の実現に向けて、取り組みを重ねてきました。連合の平和運動は、幅広い国民世論の形成をめざして、行政や関係諸団体の皆様にも、行動への参加と協力を呼び掛けさせていただいております。

原水禁とKAKKINの両団体には、日ごろからの連携に加え、本集会にも共催団体として、参加・ご協力をいただきました。

また、お手元のパンフレットにもありますように、長崎県はじめ多くの皆様にも後援団体としてご参加いただいております。

連合の呼びかけにご賛同いただきました皆様に、主催者を代表して心より感謝を申し上げます。

そして、本集会には、公務ご多用の中、長崎県の大石賢吾知事、長崎市の鈴木史朗市長、長与町吉田慎一町長、時津町吉田義徳町長、長崎平和推進協会 調漸理事長、長崎外国語大学姫野順一学長にもご臨席を賜っております。

また、国際労働組合総連合（ITUC）の郷野晶子会長にも、ご臨席をいただいております。誠にありがとうございます。

さて、今年で戦後78年が経過する中、原爆の悲惨な体験を語ってくださる、いわゆる「語り部」の方々の減少が進んでいます。

連合は「語り部」の皆さんの思いを継承するために、さまざまな取り組みを展開していますが、本集会においても、後ほど、山田一美様より、被爆体験をお話しいただくことにしております。

また、本来であれば、明日実施する予定でありました「ピース・ウォーク」、「万灯流し」につきましては、台風に伴う天候不良のため中止という判断をさせていただきました。平和への想いや被爆の実相に触れることのできる貴重な場であるとともに、これまでの連合長崎の皆さんのご尽力を考えると苦渋の決断となりました。

明日、8月9日の午前11時2分には当時の状況に思いをはせていただきながら、それぞれの場所で追悼そして平和への祈りを捧げていただきたいと思います。

核兵器は、人類史上最も破壊力のある非人道的な兵器であり、一旦使用されることになれば、その悲劇は計り知れません。しかし、現在もなお、世界には12,000発以上の核弾頭が存在し、人類は核兵器の脅威にさらされ続けています。

また、ウクライナ情勢をめぐり、ロシアが核兵器の使用を示唆し威嚇を続けている

ことや、北朝鮮が度重なる弾道ミサイル発射を強行していることなど、現在の核兵器をめぐる国際環境は、「非常に憂慮すべき状況であり、核兵器によるリスクは冷戦の時と同じレベルまで高まっている」と言われています。核軍縮が一向に進まない中、非常に危険な状態であると言わざるをえません。

本年5月には、被爆地・広島でG7サミットが開催され、その中で「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」が発表されるとともに、核兵器保有国を含む各国首脳が、広島平和記念資料館を訪れました。

核兵器廃絶は、個々の国や地域の努力だけでは達成できず、国境を越えた連携と相互理解が求められます。資料館を訪れた各国のトップリーダーは、核兵器の恐怖と悲惨さ、実相を強く胸に刻み、対話と交渉を通じて、核兵器廃絶に向けた道を着実に歩むべきと考えます。

また、G7サミットに先立つ本年4月には、働く者の主張をG7サミットに反映させることを目的に、「L7サミット」が東京で開催され、連合の芳野会長が議長を務めました。G7各国のナショナルセンターやITUC、OECD労働組合諮問委員会(TUAC)などの代表が一堂に会し、L7・2023声明として、『G7首脳は、広島で会合することの象徴的な意義を念頭に置き、核兵器のない世界を追求する勇気を持たなければならない』と表明し、G7サミットで議長を務めた岸田首相にも、要請を行いました。

日本政府には、唯一の戦争被爆国として、「核兵器のない世界」の実現に向け、核軍縮と核不拡散の強化に向けた外交努力を粘り強く続けるよう、引き続き求めていきたいと思えます。

長崎の被爆を語るには欠かすことができない人、隣人愛による真の恒久平和を訴え、願い続けた、永井隆博士は、「如己愛人：おのれのごとく人を愛せよ」の言葉にちなんで、まわりの人々の厚意により建てられた二畳一間の庵を、「如己堂」と命名し、そこに居住しながら、今に歌い継がれる『長崎の鐘』や、映画化された『この子を残して』などの著書を数多く残されました。

戦後78年が経過する今、世界の人々、一人ひとりにとって、「如己愛人」は、改めて大変重みのある言葉だと思えます。

今、世界が、平和への歩みを続けることができるか否かが問われています。核兵器廃絶への道は容易ではありませんが、単なる理想や夢で終わらせてはなりません。それは私たちの世代が達成しなければならない使命であり、次世代への責任です。

本日お集まりの皆様には、今回の平和行動に参加し、見聞きしたこと、学んだことを家庭や職場や地域に持ち帰り、平和運動の輪をともに広げていきましょう。

私たち連合は、恒久平和を願い、志を同じくする皆様や、「平和首長会議」、ITUCとも連帯・連携し、国内外を通じて活動を一層強化してまいります。

私の母は、東京で育ちました。終戦の年の3月に疎開先の長野県から東京に戻って参りました。その日の夜、東京大空襲に見舞われ、旧友のほとんどが亡くなり、逃げ延びて命が私につながっています。私は今年64歳ですが、直接母から戦争の体験を聞ききました。そうした人々は私の世代が最後になるかもしれません。私たちは次代

を担う若い人々に戦争の実相や悲惨さ、核兵器の愚かさをしっかりと引き継ぐ責任があります。

結びに、本集会で、核兵器の廃絶、そして世界の恒久平和への想いを共有し、今後の運動につなげていくことをお互いに誓いあい、主催者を代表しての挨拶といたします。

ともに頑張りましょう！

以 上